

新自由主義型グローバル化と岐路に立つ民主主義（上） ——新自由主義の暴力的表層と深層——

松 下 洸

目次

- I はじめに
- II 不可視化される今日の「暴力」：時代的・歴史的背景と特徴
 - (1) システムの構造的危機の深化と構造的暴力の拡散
 - (2) 社会を分断する構造の進展・強化
 - (3) グローバル・サウスとグローバル・ノース
 - (4) 世界を分断する壁
 - (5) 難民・移民が不可視化されるナショナルな空間と領域
- III 民主主義と市民社会を内側から破壊する新自由主義
 - (1) 政治経済史的批判
 - (2) 新自由主義社会における欲望と隷属
 - (3) 新自由主義への同意調達：新自由主義言説の浸透と成長
 - (4) 経済人間：富と権力への無限の渴望（以上、本号）
- IV グローバル・サウスにおける新自由主義と越境型暴力（以下、次号）
- V 暴力に対抗する試みとガヴァナンス構築へのアプローチ
- むすびに

I はじめに

今日、新自由主義の暴走が作り出した負の遺産は世界中で顕在化し、それに対する異議申し立てが少なからず生じている。しかし、その教義と政策はいまだ民衆の思考様式を含めあらゆる領域や空間で根強い支配的な位置を占めている。新自由主義は企業や国際機関というまでもなく、教育やマスコミの現場にも浸透してきたことは周知のことである。民主主義制度を基盤

する社会、市民社会を内部から汚染し掘り崩しているのである。「要するに新自由主義は言説様式として支配的なものとなった」であり、「われわれの多くが世界を解釈し生活し理解する常識コモンセンスに一体化してしまうほど、思考様式に深く浸透」(ハーヴェイ, 2005: 11) しているのである。このようにデヴィッド・ハーヴェイは認識する。

こうした認識と危惧はハーヴェイにとどまらない。新自由主義に対する批判的な立場に位置する知識人や研究者は、少なからず彼と通低する関心を共有している。今やグローバル化と新自由主義に関する著作は膨大な数にのぼり、またそれへのアプローチや分析枠組みも様々な研究領域で多様化している。

こうした新自由主義に関する著作の拡大について、ハーヴェイは政治経済史的研究の欠落傾向を問題点として指摘する。新自由主義化の「歴史に対して批判的に取り組むことが、ひいては政治的・経済的なオルタナティブを明らかにしそれを構築する上での枠組み」(ハーヴェイ, 2005: 13) を提示することになる、このように主張している。

本稿でまず注目するサスキア・サッセンの近年の研究(2011; 2017)は、ハーヴェイが重視する政治経済史的研究の領域に入るであろう。今日のグローバルな時代についての彼女の分析視角は、「それが国民国家によって支配される時代から生じたという事実」である。しかし、国民国家はグローバルな枠に十分収まりきれない。したがって、「ナショナルなものの部分的な解体、グローバル化と脱ナショナル化のプロセスの両方を含み込んだ変化」を説明する必要がある(サッセン, 2011: 11)。この基本的姿勢から「脱ナショナル化の過程についての研究」、すなわち「ナショナルとグローバルのこのうろこ状の重なり合い」の分析の重要性を強調する(サッセン, 2011: 17-18)。

加えて、近年、サッセンは後に述べるように、「放逐」(expulsion) 概念を提起し、不可視化されている人々と空間を可視化する分析を深めている。

政治経済史的研究に関して、ハーヴェイとサッセンをまず取り上げたがこの二人には限らない(若干の研究を挙げれば、グローバル・キャピタリズムの研究から新自由主義を把握するWilliam I. Robinson 等にも注目したい)。

他方で、政治経済史的研究とはアプローチと枠組みを異にする新自由主義批判研究のトレンドにも注目したい。とくに、本稿ではフレデリック・ロルドンやウェディ・ブラウン、クリスチャン・ラヴァルを取り上げ彼ら研究とアプローチに注目し言及したい。

F. ロルドンはフランスの経済学者であるが、経済学研究を超えて、資本主義のもとでの欲望と隷属の関連をスピノザの「コナトゥス」(自存力) という概念に注目して独自の資本主義分析を展開している。彼は資本主義の隠された支配原理とその制度的形態を解明している。彼は自身の研究目的をあるインタビューで端的に述べている。

「私は、マルクス的な`関係の構造主義、をスピノザ的な`情念の人類学、で豊富化すること、

つまり諸個人を動かすもの、言い換えるなら諸個人の欲望の潜在力やその感情を再発見することに興味を持ったのです。しかも、つねに資本主義の構造のなかでそれを把握しようということです」（ロンドン、2012：257-258）。

わが国でもかなり知られている、カルフォルニア大学バークレー校の政治哲学者ウェンディ・ブラウンは『いかにして民主主義は失われていくのか——新自由主義の見えざる攻撃』（原文、*Undoing the Demos; Neoliberalism's Stealth Revolution*, 2015）で、新自由主義がラディカルな民主主義を含め「民主主義のもろもろの原則、実践、文化、主体、制度に攻撃を仕掛けている」（ブラウン、2017：1-2）と認識している。新自由主義は「理性の規範的な命令」として「あらゆる人間の活動域と活動とを、人間そのものとともに、経済的なものの特有のイメージに合わせて変形」させる。そこではすべての行為は経済的行為となる。わたしたちは「どこにしようともホモ・エコノミックスであるほかない」のである（ブラウン、2017：2）。

ブラウンの新自由主義に関する議論の特徴は、「新自由主義を一連の国家政策、資本主義の一段階、あるいは資本家階級の利益を回復するために市場に放たれたイデオロギー」などと理解するアプローチとは異なり、「規範的理性の命令」と考えている。それは「経済的価値、実践、方法に特有の定式を人間の生すべての次元に拡大する、統治合理性のかたち」をとる。そして、重要なことは、「新自由主義的合理性が市場モデルをすべての領域と活動へ——貨幣が問題でない領域であっても——散種し、人類を市場の行為者であり、つねにどこでもホモ・エコノミックスでしかありえないものとして設定する」という点にある（ブラウン、2017：26-27、傍点著者）。

ホモ・エコノミックス自体は歴史的に固有のかたちをとりうる。今日のホモ・エコノミックスは、アダム・スミスの生き物とはかけ離れており、「強度に構築され統治された人的資本の一部」である（ブラウン、2017：2）。ホモ・エコノミックスと新自由主義に関わって、クリスチャン・ラヴァルの『経済人間——ネオリベラリズムの根底——』にも言及したい。

ラヴァルのこの著書の目的は、「今や世界中の人間が、この＜^{ホモ・エコノミックス}経済人間＞に変身した成り行き」（ラヴァル、2015：2）を描くことにあった。資本主義における「人間としてのある特殊な歴史的形態」（ラヴァル、2015：2）、「きわめて特異なタイプの人間、たえずおのれの利益のために他人と争い、自分の役に立つときにのみ他の人々と協力する気になるエゴイスト人間、そうした人間が生まれる経験」（ラヴァル、2015：1）を膨大な資料を通じて述べている。

以上、簡単に近年の本稿が目指す新自由主義への批判的研究の特徴と思われる基本的視角を取り上げた。そこには、新自由主義の発生と拡大の経済的背景、新自由主義推進と階級的諸関係、新自由主義国家の問題、新自由主義の支配と収奪の現実の発現形態などある程度知られており、検討が進んでいる事実と焦点を合わせているわけではない。本稿は、多くの人が認識し視覚化している「暴力的」事実への関心ではなく、新自由主義に人々がすすんでなぜ飼い馴

らされるのか、人類の歴史的成果と考えられる民主主義や基本的人権がどのように失われていくのか、その結果、人間が生存するために不可欠な自然と空間が、また人間の生そのものがどのように破壊され剥奪されているのか、こうした問題を考察する。総じて言えば、新自由主義が引き起こすこうした諸問題への無自覚化と「常識」化や「不可視化」、そのための同意と合意の調達、「新自由主義の原動力としての欲望」が深く作用している。こうした問題と現実に触れた上で、本稿は新自由主義を乗り越える様々な運動の現状と可能性をも展望してみたい。

そこで、最初に今日の「暴力」が不可視化されているが、その時代的・歴史的背景と特徴をおさえておく。

次に、新自由主義が近代の政治的成果である民主主義を内側から如何に破壊するようになったのか、この問題を新自由主義言説の浸透と成長から考察する。

第三に、新自由主義のグローバルな、かつ全般的な覇権とグローバル・サウスにおける越境型暴力の内在的連関を検討する。

そして、第四に、こうした暴力に対抗する試みとそのオルタナティブとしてのガヴァナンス構築へのアプローチを探究する。

Ⅱ 不可視化される今日の「暴力」：時代的・歴史的背景と特徴

(1) システムの構造的危機の深化と構造的暴力の拡散

サッセンは、『グローバル資本主義と＜放逐＞の論理：不可視化されゆく人々と空間』（2017年、原書 *Expulsions: Brutality and Complexity in the Global Economy*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2014）で資本主義の現段階、すなわち、グローバル資本主義の収奪メカニズムとシステムの特徴を総合的かつ鋭く分析している。

サッセンの研究の基軸となる概念は「放逐」（expulsion）である。この概念が含意する問いについて彼女は次のように述べている。

「社会階層や、都市と農村部の分断、世界中のグローバル・ノースとグローバル・サウスの分断を横断する多様な例が、現在関連性がないと見える多くのものを関連づける、より深いシステムのダイナミックスが表面化したものなのか、つまりはそのローカルな形態なのか」（サッセン、2017：8）

そして、サッセンの仮説は、「その外観や社会秩序がどれほど多様であろうとも、それぞれの例の特徴の下には、少数の非常に基本的なダイナミックによって形成される新しいシステムの潮流が存在する」（サッセン、2017：9）というものである。そこで、彼女は、「システムの末端を概念的に地表下の潮流——私たちの現在の意味のカテゴリーによっては可視化しにくい潮流——が存在する兆候と考える。私が自らの問いかけのポイントをシステムの末端に据える

意味はそこにある」（サッセン、2017：6）、このように述べる。

サッセンは「単純な残忍さを生み出す複雑な手段」を探るために、「新たな分析手段の開発の必要性」から「概念的に地表下のダイナミクス」に焦点を合わせている。こうして、グローバル資本主義の病理を把握する一つの方法である「不平等の増大」などの概念を踏み越えることになる」と強調する。

＜単純な残忍さを生み出す複雑な手段＞

サッセンの中心的仮説は、「システムの末端の増殖」、すなわち「単純な残忍さを生み出す複雑な知識形態の増加が現進行中だ」（サッセン、2017：4）というものである。その例として、「収奪的なセクターとして概念化」された「複雑な金融商品の急増」、「主権国家に外国の主権国民国家の広大な土地を取得することを可能にさせる、契約の複雑な法的・会計上の特徴」、そして「鉱業に、土地と水系を破壊することを可能にさせる優れた工学と技術革新」を特に挙げている（サッセン、2017：7）。

さらに、サッセンは放逐という概念の中に広範なプロセスや条件を含め、これまで存在してきたが、世界中で質的・量的に著しく拡大している深刻化する「新しいタイプの放逐」を警告している。貧しい人々の増大、難民キャンプに収容されている難民、刑務所に収監されている周縁化された人々、ゲットーやスラムに収容されている職のない人々など性格や内容がことなる社会階層が直面している放逐である（サッセン、2017：7-8）。

「新しいタイプの放逐」や「概念的に地表下のダイナミクス」の複雑で過酷な様態の具体的な事例と展開については、本稿で後に紹介するようにサッセンは包括的かつ総合的に論じている（サッセン、2017、第1章から第4章参照）。

＜理論と解釈の脱構築＞

ここではグローバル資本主義を考察するために重要と思われる理論と解釈の脱構築についてサッセンの方法について触れておこう。

第一は既存のカテゴリーへの疑問である。

「地表下の潮流という言葉を用いることは、私たちの経済や社会、私たちの生物圏との相互作用についての知識を束ねる既成のカテゴリーを疑問視する一つの方法である。それによって私たちは、今日の諸問題は従来の諸問題が極端になったものかどうか、あるいは不安を抱かせるような新たなものの現れなのかを評価できる。地表に表れている紛れもない放逐が、地表面下に存在するよりも大きなダイナミクスを見えなくさせているのかどうか、私は検証することにする。規定の区分を超えてこの特性——放逐の可能性——を拡大することで、私は地表下の潮流という考えに導かれる。」（サッセン、2017：23；傍点松下、以下同じ）

サッセンのねらいは、「抽象的なカテゴリー化では見落としてしまう恐れのあるものを捕捉

する」ために、「現在の潮流を解釈する既定のカテゴリーの圧倒的な重さを棚上げにして発見を試みる」こと、すなわち「脱理論化を通してもっとも基本的な要素に解体する」ことである（サッセン、2017：23-24）。

第二に解釈の方法である。サッセンは「既定の確立された概念的・歴史的境界線を横断するダイナミックスも働いているのかどうか」を検討すること、すなわち「今日の主要なカテゴリーの限界」に関心を示している。「地政学的区分を横断する概念的な地表下の潮流を感知するのに役立つ地表の事実」（傍点、サッセン）に関心をよせる。その出発点として1980年代を画期とする「二つの根本的な転換」にスポットライトを当てている。

その一つは、世界の多くの地域を重要な経済運営のための極端なゾーンに変えている物質的な展開である¹⁾。すなわち、規制が弱くコストのかからない地域に国境をまたいで展開するアウトソーシングとグローバル・シティのネットワークである（サッセン、2017：26）。

二つめは、グローバル・シティのネットワーク内部における金融の台頭である。すなわち、今日の新たな特徴である非常に複雑な装置を開発する金融の能力（金融商品としてのデリバティブなど）で、これはケインズ主義の時代からの大転換を示すものである（サッセン、2017：26-27）。

この時代は、「もはや労働者や消費者という価値ある存在でなくなった数多くの人々の窮乏化と排除を意味している。しかし、それは、かつて資本主義の発展に不可欠だった下層ブルジョアジーや伝統的なナショナル・ブルジョアジーなど経済的なアクターが、この巨大システムにとって重要な存在でなくなった」ことも意味している。また、「今日の資本主義の観点からは、アフリカやラテンアメリカや中央アジアの多くの地域における天然資源の方が、それらの土地に暮らす労働者や消費者よりも重要である」ことを意味している（サッセン、2017：27）。

そこで、サッセンは問うている。「その次に来るのは何か？」と。この問いは新自由主義型グローバル化をいかに乗り越えるかという課題と展望に関わる。

「今日、抑圧された人々はほとんど放逐され、抑圧者から遠く離れた場所で生き延びている」（サッセン、2017：28）とサッセンは言う。

だが、この彼女の指摘については後に言及するが、それは脱新自由主義型グローバル化を構想する際に積極面とマイナス面がある。たとえば、グローバル・ノースにおける被抑圧者の存在と運動のダイナミズムは脱新自由主義型グローバル化構想の可能性にも関わる。

(2) 社会を分断する構造の進展・強化

＜ケインズ主義からの大転換、収奪性の編成＞

新自由主義の歴史的な位置づけやその本質、世界的な展開の特徴については、デヴィッド・ハーヴェイの研究と問題提起を通じてかなり知られている（ハーヴェイ、2005；2007；2012 など）。

そのキーワードの一つは「略奪による蓄積」による「階級権力の回復」である。

1960年代末からケインズ主義的政策の限界が顕在化し、1970年代に始まった危機は、第二次世界大後の社会的蓄積構造の枠組みでは解決不可能であった。第一世界において、「ケインズ - フォード型」福祉国家の連続的な崩壊があった。そして、とりわけ第三世界では、経済的収縮と1980年代の債務危機に示されるように、開発主義プロジェクトはすでに使い果たされた（Robinson, 2012:352）。「埋め込まれた自由主義」（Ruggie, 1982）は次第に枯渇し一掃され、社会的連帯のあらゆる形態は解体されたのである。

1990年代に入り資本移動の自由化に対する熱狂が生まれた。この政策的パッケージは当初、1989年に経済学者ジョン・ウィリアムソンによっていわゆる「ワシントン・コンセンサス」としてまとめられた。このリストには、規制緩和、貿易と金融の自由化、民営化、通貨の過大評価の回避、そして財政規律などが含まれ、1990年代半ばまでには、安定化、自由化、民営化の三つの言葉に要約できる政策課題に関連づけられた（ロドリック、2014, 194；グランディン、2008；クライン、2011）。

サッセンは新自由主義の今日の資本蓄積理解に関して、従来の発想に「肉づけ」しようとする。そのポイントは、今日の蓄積が「複雑な操作や非常に特化された技術革新を通じて行われる本源的な蓄積の現代版」であるという認識である。それは「世界各地の経済の縮小や、地球全体の生物圏の加速度的な破壊、さらには根絶され駆逐されたと思われていた場所での極度の貧困や過酷な状態の再燃」といった事態の発展である（サッセン、2017：29）。

この事態は、収奪的エリート形成というよりその極端な形態で、「急激な富の集中を駆動する収奪性の「^{フォーメーション}編成」、すなわち、エリートと、強力な金融が一つの重要な駆動力であるシステムの能力の合体の形成」である（サッセン、2017:30）。サッセンは、その具体例としてオックスファム（Oxfam）が指摘する世界規模の貧富の格差、米国企業の利益の爆発的急増を遂げる一方での法人税の減少、中流層の衰退、「米国の所得の上位10%が21世紀の最初の10年間の所得の伸びの90%を獲得した事実」（サッセン、2017：30-32）など多くの放逐の例を彼女の著書の中で挙げている。

(3) グローバル・サウスとグローバル・ノース

<二項対立概念の終焉>

ここで筆者がこれまで若干の議論を提起してきた「グローバル・サウス」と「グローバル・ノース」という概念をサッセンの分析概念に関連させたい。なぜ途上国ではなく「グローバル・サウス」なのか？

この問いにはこれまでも繰り返し言及してきたが簡単に再確認しておきたい（松下、2016；2016b；2016b；2017a）。

「グローバル・サウス」概念が登場する背景は、ハーヴェイやサッセンなども認識していることだが、新自由主義を生み出してきた20世紀型資本主義（国民国家を前提にした「フォード主義的・ケインズ主義的」資本主義）の限界および冷戦の終結をひとつの契機にした新自由主義型グローバル化の加速度的進行がある。

このグローバル化の展開のもとで、たとえば、環境悪化、世界的規模での格差拡大、不法移民・難民増大、多様な形態の国境を超える犯罪、コモنز——保健、水、輸送、エネルギー、知識、種子など——の収奪など実に多くの越境型の問題群が噴出してきた。これらの現象は、いまや、国家と社会の安全保障のみならず、リージョナルやグローバルな社会を危うくする脅威として考えられるようになった。また、世界的規模で展開するアグリビジネスの戦略や投機的ビジネスは、庶民の日々の生活の様々な領域で直接影響を及ぼしている。こうして、グローバル化の影響は不均等にはあるが、リージョナルな空間のみならずローカルな場にまで、普通の民衆の生活まで深く行き渡っていることは十分認識されている。

そして、新自由主義型グローバル化の影響は「南」の人びとだけではない。「北」の人びとも同様である。多国籍企業の先例のない権力と支配の拡がり、そして、そのグローバルな生産の展開により、グローバルかつナショナルに富の激しい集中があり、超富裕層と大多数の人々とのギャップは拡大している。新自由主義型グローバル化は「グローバル・ノース」と「グローバル・サウス」との間に、また一国内においても急激な社会的不平等を生みだした。

注目すべき現実には、「南」と同様な貧しい場所は「北」にも多数存在し、同時に、「南」のエリートが富を蓄積している多くの裕福な地帯が「南」にもある。グローバル化のもとで、国境を越えて組織され拡散されている新たな社会的ヒエラルキーや不平等の諸形態が出現している（松下、2016c: 68）。

こうした社会的ヒエラルキーと不平等のグローバルな存在は、従来の「途上国」や「南」といった概念では捉えきれなくなっている。グローバル化時代の「南」は、かつての「南」ではなく「グローバル・サウス」なのである。冷戦終結後、「第二世界」の崩壊により「第三世界」概念は言うまでもなく使われなくなった。先進国へのキャッチアップをイメージした「発展途上」という用語も、「先進」と「途上」の二項対立も有効性を失いつつある。

こうした区分は地理的・空間的な現実を反映している静態的な類型化であった。また「途上国」という表現は、欧米中心の経済主義的基準にとらわれていた。さらに、それは国家中心的な二分法的発想も免れていない（傍点、筆者）。こうして、いまや「途上国」や「南」といった概念では、今日の世界を認識する枠組みとしては不十分と考えられるようになった（Bullard, 2012、傍点筆者）。

＜被支配集団と「抵抗する」諸集団を包含＞

カルフォルニア大学（サンタ・バーバラ校）の社会学者、ウィリアム I. ロビンソンは資本

主義の新たな段階としてグローバル資本主義を真に多国籍な資本の台頭、多国籍資本家階級の出現、国家の多国籍化、すなわち多国籍機関ネットワークへのナショナルな国家の吸収、こうした視角から定義づけている（Robinson, 2015）。

彼は世界中に拡がっている自由貿易協定に関して、それは多国籍資本家階級への一層の権力集中とローカルな共同体の解体、金持ちと貧しい人々のグローバルな分極化を進めている、と分析する。

こうして、グローバル・サウスはグローバル資本主義の重要な部分を構成している。「グローバル・サウス」概念は、センターとペリフェリー間の、そして「北」と「南」との多くの区別が不鮮明になっている事実を反映している。グローバル化のもとで、「国境を越えて組織され、拡散されている新たな社会的ヒエラルキーや不平等の諸形態が出現している。センターとペリフェリー——「北」と「南」——は、地理的カテゴリーというよりもますます社会的カテゴリーとなっており、それはトランスナショナルな社会構造のなかの位置」（Bullard 2012：727、傍点筆者）を意味する。

以上の指摘を別の側面から言い換えると、グローバル・サウスは、グローバルな支配および抵抗の様式によって特徴づけられる理論的ルーツをもつ概念である。そして、新自由主義型グローバル化の下で、それは搾取や疎外や周辺化といった共通の経験を有するあらゆる被支配集団と「抵抗する」諸集団を包含する政治的アクターを示す概念でもある。「グローバル・サウス」は「不平等を伴って複合的發展」するグローバル・サウスなのである。

以上述べた意味で、今日、従来の「途上国」と「先進国」、また「南」と「北」といった区分は再考されなければならない。「途上国」や「南」というカテゴリーは現状を十分に反映しきれていない。そこで、グローバル・サウスの視角が重要かつ前提となる。新自由主義型グローバル化の展開の重層性と複合性に対応して、グローバル・サウスの重層性と複合性を認識し分析することが極めて重要である。

「グローバル・サウス」概念は、国民国家中心の分析から離れ、新たな段階に向かうグローバル資本主義の推進力としての多国籍資本と多国籍化する国家によるグローバル世界の再編成の現状と行方を考察するための有効な理論的枠組みである。同時に、これはナショナル・レベルの諸現象や国家間のダイナミックな分析を放棄することではない。むしろ、「ローカル／ナショナル／リージョナル／グローバル」の連結関係のなかで、ナショナルなレベルでの「国家 - 市民社会 - 市場」の変容する相互関係を考察することが必要になる。

「グローバル・サウス」概念は「21 世紀」の世界認識を拡げ、21 世紀の「重層的ガヴァナンス構築」に向けた「政治的グローバル・サウス」や「抵抗のグローバル・サウス」による対抗戦略の検討を要請することになる（松下、2016c：69-70）。

＜地理的・概念的・歴史的境界線を越えるダイナミズムの検証＞

筆者が論じた「グローバル・サウス」の視点と分析は、サッセンのそれとかなり類似している。サッセンの分析の目的は、「放逐されたものの空間への移行過程を可視化すること、つまり、・・・放逐の目に見える場や瞬間をとらえること」である（サッセン、2017:257）。そこで、彼女の課題は「既定の概念的・歴史的境界線を越える他のダイナミックスも働いているかどうかを検証すること」（サッセン、2017:259）にある。

ロビンソンは、「グローバル・サウス」概念が「国民国家中心的分析から決別する」ことを強調する。言うまでもなく、ロビンソンの主張を借りるまでもなくナショナルを基礎にした時代認識は既に有効性を失っている。サッセンも認識しているように、「20世紀末に向かうにつれて、ケインズ主義や平等主義、公正な社会を構築するプロジェクトを支えるネーションを基礎にした前提は崩れ始めた」のである（サッセン、2017:254-255）。

他方で、ロビンソンは次のことも強調している。「ナショナル・レベルの過程や現象、あるいは国家間ダイナミズムの分析を放棄」せず、「具体的地域やその特殊な環境を検討することなしにグローバルな社会を理解することは可能ではない。すなわち、その全体との関係で、全体の一部として検討すること」（Robinson, 2015:17）であると。

このロビンソンの主張は、サッセンによる放逐の空間であるグローバル・サウスのシステムの末端の広範な考察によって補強され、説得性を確保するように思われる。

「放逐されたものの空間とは何か？それは近代国家や経済の標準的な尺度では見ることができない。しかし、それらは概念的に目に見えるものでなければならない。・・・放逐されたものの空間は概念的に認知されることを求めて叫んでいる。・・・それらは概念的に地表下の条件であり、地表に出す必要がある。それらは、ローカルな経済や、新たな歴史、新たなメンバーシップの形態を形成するための新たな空間となる可能性を持っている。」（サッセン、2017:266）

(4) 世界を分断する壁

＜排除・統合・監視＞

2016年のオックスファム報告書は、「世界の最も裕福な62人が世界の貧しい半分の37億人の総資産に匹敵する資産を所有する」と公表し世論を驚かしたことは記憶に新しい²⁾。

トランプ政権の誕生を機に社会の「分断化」という言説が頻繁に喧伝されている。もちろん、「分断化」は多くの国でそれ以前に現実化していた。問題は米国という高度先進国でも明らかになったことであろう。米国における所得の不平等の拡大は様々な資料で語られているので繰り返さない（とりあえず、サッセン、2017:51-54）。しかし、再認識されるべきは所得の下位層のみならず中間層の縮小がトランプ政権の排除と保守的な統合の基盤を形成していることで

ある。

こうした事態はギリシャ、スペイン、ポルトガルなどのユーロ圏やその他の先進国内でも生じている。経済的、社会的な市民の生活水準の悪化は、ポピュリズムなどの政治的諸現象を浮上させている（松下他編、2017）。1980年代に本格化した新自由主義や冷戦の崩壊とグローバル化は、それまでのケインズ主義とフォーディズムのもとで統合的社会編成を大転換させた。以後、グローバル化が世界の分離と・分断化に結びついた選択的包摂・統合の不均等な分極化過程を推し進めてきた。

今日、「分断化」のグローバルな現象はあらゆるレベルで認識され、政治的論争に発展している。貧困層の急増、高水準の失業、国内移住、住宅ローンの支払い不能による立ち退きと住宅の差押え、難民、犯罪の増加と収監の急増、民族的・宗教的対立の激化など等である。

こうした「分断化」は多様な暴力を生み出す温床になる。一部の途上国では、テロ、人身売買、違法伐採、違法ドラッグ、武器輸出、サイバー犯罪、資金洗浄など新自由主義がもたらす「構造的暴力」に直面している。ネオリベラリズム時代の「排除」と放逐により、多くのアフリカ諸国では「構造的な関連性の欠如」が明らかになった（松下、2007、第2章参照）。

<見える「物理的壁」から見える「不可視化される「壁」>

21世紀に入りとりわけ、世界の「分断化」の象徴的現象として「壁」問題がマスコミ等をにぎわせている。

国民国家システムには、権力と領域との間に固定的な関係があることを前提に構想されてきた。ウェストファリア諸原則は領域主権と厳格に引かれた国境を前提に国民国家という擬制のうえに構築されていた。しかしそれは現実の上では決して絶対的なものではなかった。しかし、「世界の政治的分割に関する支配的な思考様式であったし、現在も大体がそうである」。グローバル化の拡がりとは、主権的領域国家という近代的な枠組みを現実には掘り崩してきた。

現代世界における領域的前提や境界の役割は過渡期にあり、再び問われている。われわれは、「現在、20世紀初めにおける社会経済的組織や活動の新しい様態、およびアイデンティティが出現したときと同様の過渡期を経験している」（ディーナー／ヘーガン、2015、167～169頁）。

経済や貿易の領域では、多国籍企業は共通市場や低関税から恩恵を受けている。だが、移民や難民に加え、テロリストやマフィアなどの非合法あるいは破壊的なグループの越境を防ぐためにフェンスが作られている。国境の安全保障化である。2011年現在、約1万2500マイル（約2万キロメートル）に及ぶ世界中の国境は、壁やフェンスによって明示され、さらなる1万1000マイル（約1万8000キロメートル）では、監視テクノロジーやパトロールといった顕著な安全強化策がとられている（ディーナー／ヘーガン、2015、12頁）。

以下の「壁」に関する記述の多くは、アレクサンドラ・ノヴォスロフ／フランク・ネス『世界を分断する「壁」』（2017）に依拠している。

「分断化」がもたらす多様な暴力に対する「安全保障」の象徴的な可視的・物理的な構造物が、呼び方はいろいろあるが壁である³⁾。

人間が壁を築くのは新しいことではない。紀元前4世紀のアレクサンドロス大王の時代から、中世の全時代を通じて城や防護壁や要塞、そして第二次世界大戦中に建設された「大西洋の壁」の建設（「マジノ線」あるいは「ジークフリード線」）まで「壁の誘惑」は何世紀にもものぼる（詳細は、ノヴォスロフ／ネス 2017：20-23）。

そして言うまでもなく、「壁」は過去の実在ではない。今日の「壁」建設やその誘惑は、多くの場合、グローバル化と新自由主義の影響が関わっている。国家主権の空洞化にともなう難民、移民、密輸品、暴力を阻止するために建設される。「領土とは関係のない、国境を超えた不均衡な脅威に立ち向かう壁」は「領土の境界を可視化させるという現象を助長し、閉ざされた国境にしたいという叶わぬ願望」（ノヴォスロフ／ネス 2017：24）である。

21世紀のもうひとつの新たな現象は、小規模の壁が増えたことである。たとえば、戦争中の都市（カブールやバグダッド）、主脳会議が開催される都市、1970年代に米国で生まれた「ゲイテッド・コミュニティ」、リオデジャネイロのファヴェーラを囲む壁など「都市の中の地区を囲む壁」である。この現象は貧富の格差の激しい社会的・政治的不安定を抱える地域に生まれている。

ノヴォスロフとネスは、壁のもつ三つ主な機能を指摘している（ノヴォスロフ／ネス 2017：27-30）。

まず、「獲得した領土の現状維持と境界線の強化という機能」である。

次に、領土をコントロールし、出入りを管理する「禁止と管理の機能」。

第三に、「短期的な安全保障の観点からの保護機能」。この第一の目的は、「迅速で具体的な結果を求める世論を満足させる」ことである。アメリカ・メキシコ間も国境に壁を建設・強化するのもこうした安全保障の論理である。

こうした壁のもつ三つの機能は、物理的・象徴的な「分離」という一つの論理に集約される。彼らは強調する。

「未知のもの、理解できないもの、不幸なもの、疑わしいもの、そういった見たくないものを壁の向こう側に締め出す。分離することは、向こう側の存在を否定することだ。この意味で、壁は非対称性を示す。片方の側では望まれ、もう片方の側では押し付けられた分離、そこから生じる不均衡と無関心が壁によって目に見える形になる。」（ノヴォスロフ／ネス 2017：31）

「非常に複雑で多様な側面をもつ問題を解決するよりも壁——二元的解決策しか提案しない——を造って問題を回避する方が簡単だから分離する。リスク防止策がコンクリートと鋼鉄の政策に変容する。それは、政策を構築するための対話の失敗、政治の失敗だ。」（同

上、傍点筆者)

ノヴォスロフとネスは、さらに壁の政治的・文化的意味を述べる。多くの場合、「壁はダイナミックで活力ある社会から、獲得した利点を守るのに腐心し敵対的で理解できなくなった外界から自らを守ろうとする防衛姿勢の社会への変化を示す」(ノヴォスロフ／ネス 2017: 32)。しかし、新たな壁は効果がなく無力である。それはむしろ「ポスト国家時代にあって新しいタイプの外国人嫌悪、殻への閉じこもりを引き起こす」(ウェンディ・ブラウン)。

結局、壁は政治的な失敗であり、安全保障面の効果は見せかけにすぎない。壁は政治的、経済的、人道的、社会的な問題の治安面の解決にすぎない。壁は「国家の衰退と、新たな国防上の脅威・・・に対応できない無能さの象徴」である(ノヴォスロフ／ネス 2017: 34)。

さらに、壁は人間の思考の柔軟性と創造性を失う。「壁は恐れから生み出され、暴力を恐れるあまり、より強力な防衛策を必要とする暴力を生み出す・・・。壁を造る側にとっての罠がそこにある。実際には、物理的な壁は頭の中にある壁の反映」(ノヴォスロフ／ネス 2017: 36、傍点、松下)である。

難民は、これまで述べてきたように「新しいタイプの放逐」である。移民も同様である。難民や移民を考察するには「地表面下に存在する大きなダイナミックス」を考察することが不可欠である。

(5) 難民・移民が不可視化されるナショナルな空間と領域

<難民：強制移動を強いられた人々>

UNHCR (2017) が発表したグローバル・トレンドは世界で移動を強いられた人々について報告している。その数は5年連続で増加しており、それは紛争、暴力、迫害などを原因としている。2017年末時点で家を追われた人の数は6850万人にのぼる。そのうち2017年に新たに、あるいは再び移動を強いられた人は1620万人である。これは、1日に4万4500人、2秒に1人の割合で移動を強いられていることを意味する。

家を追われた6850万人のうち2540万人は、紛争、暴力、迫害などで移動を強いられた人である(2016年から290万人の増加)。その内訳は国内避難民が4000万人、難民が2540万人、庇護申請者が310万人である。

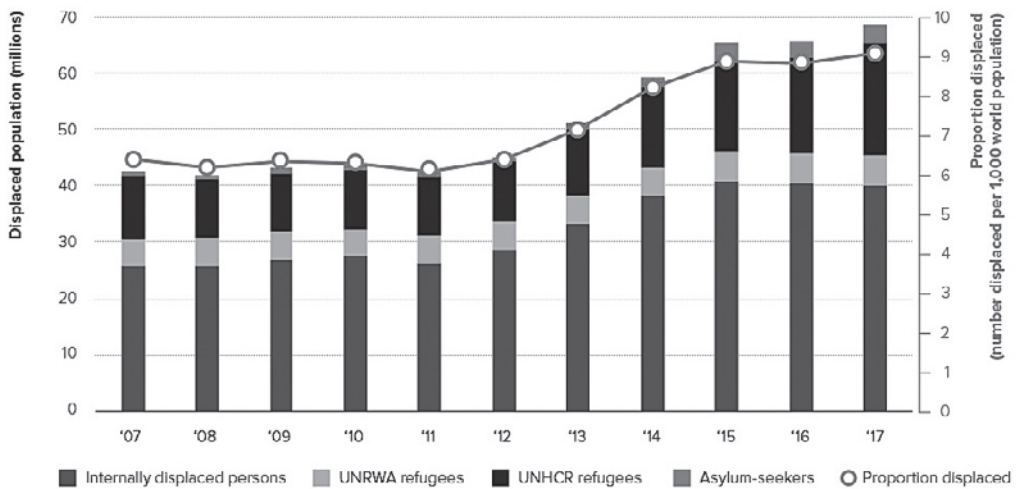
2540万人の難民のうち、5分1強がUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の保護を受けているパレスチナ難民である。残りはUNHCRの支援対象者であり、その3分の2がシリア(630万人)、アフガニスタン(260万人)、南スーダン(240万人)、ミャンマー、ソマリアの5カ国から発生している。

難民のうち18歳未満の子どもの割合は52%で、2009年の41%から増加を続けている。保護者を伴わない、避難途上で離ればなれになった子どもは17万3800人を数えている。

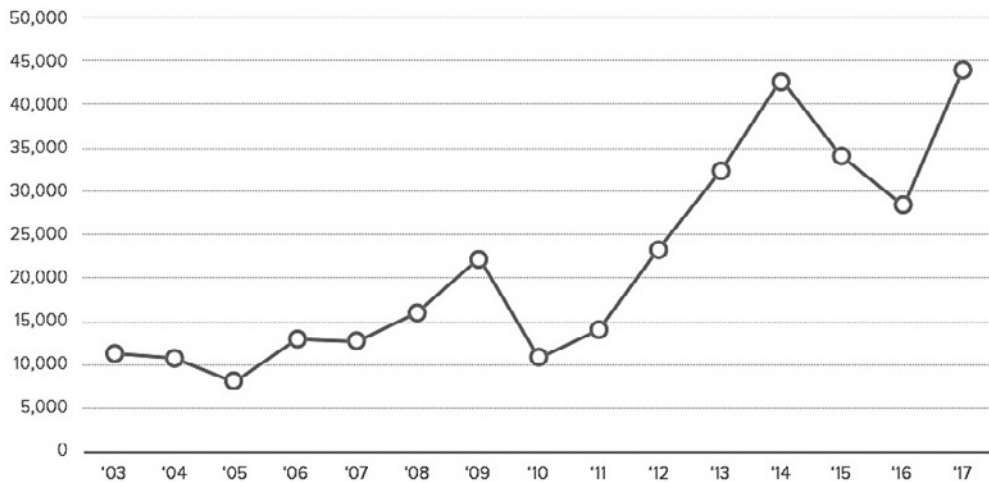
難民の受け入れ国はトルコが350万人で、その多くがシリア難民である。ウガンダとパキスタンが140万人、レバノンが99万8900人と続く。レバノンは人口の6人に1人が難民である。UNHCRの支援対象難民の63%を10カ国に集中している（以上は、UNHCR 2017より。以下の図参照）。

避難民を生み出す要因は、紛争、暴力、迫害に加え環境破壊によって追われる人も増加している。バングラデシュとモザンビークは典型例として挙げられる。バングラデシュはサイクロンや洪水に脆弱であり、他方、モザンビークは砂漠化と海面上昇の両方に悩まされている。

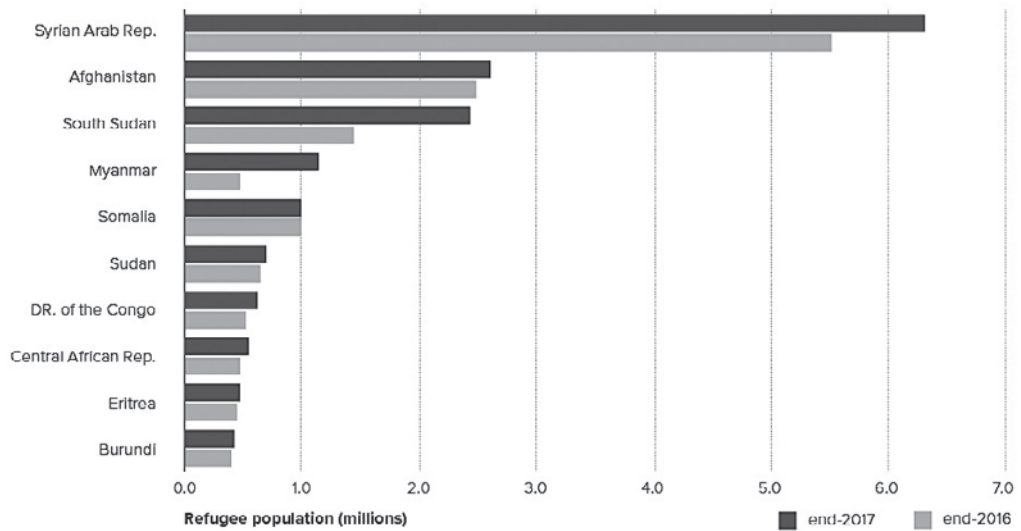
Trend of global displacement and proportion displaced | 2007-2017



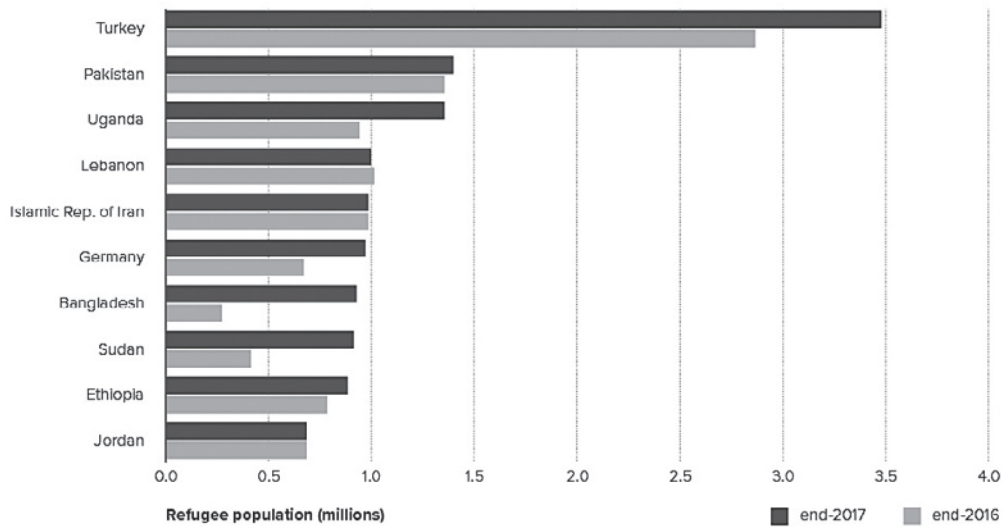
Number of people newly displaced per day | 2003-2017



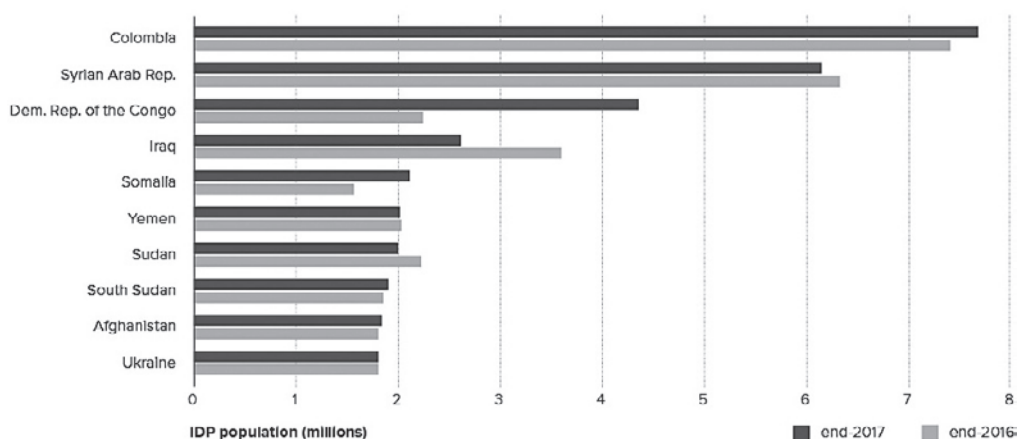
Major source countries of refugees



Major host countries of refugees



Ten largest IDP populations



Ⅲ 民主主義と市民社会を内側から破壊する新自由主義

(1) 政治経済史的批判

＜なぜ今も新自由主義か？＞

「ケインズ-フォード型」福祉国家の崩壊を契機にその影響と支配をグローバルに拡大・浸透させてきた新自由主義の帰結は今日では明らかになっている。新自由主義への批判的説明は各種の文献で展開されている。これらの批判の焦点は、①激化された不平等、②露骨な商品化と販売、③ますます増大する企業の政府への影響力、④経済の混乱と不安定、これら悪影響に的が絞られている（ブラウン、2017：24-26）⁴⁾。

これまで新自由主義に対して多様な批判が発せられてきた。にもかかわらず新自由主義は今なお影響力を維持し、場合によってはその趨勢は支配的でさえあるのが現実である。どうしてなのであろうか。このように問いかけたハーヴェイは、次のようにその理由のいくつかをあげている（ハーヴェイ、2013a：123-127）。

「新保守主義的および新自由主義的シンクタンクと企業の支配するメディア、およびアカデミズムの多くの部分がなお討論を支配する力をもっていることにある。学問分野としての経済学の力と威信、その理論化の非歴史的で非空間的な様態もまた、大きな役割を果たしている。」（ハーヴェイ、2013a：123）

新自由主義が生み出している地理的不均等発展にも注目すべきである。それは、「世界的舞台での新自由主義化の単なる結果であっただけでなく、その推進力でもあった」。このことは、1970年以降に経済発展に成功した諸国家（日本、台湾、中国、シンガポールなど）や諸地域（シ
126（536）

リコンバレー、バンガロール、珠江デルタ地帯など）に例証されている。そして、政治権力の分権化は、新自由主義プロジェクトに対するきわめて重要な補助手段となった。たとえば、「中国では、経済的な意思決定が地域、省、自治体へと、さらには村落レベルにまで少しずつ分権化されていったが、それは1978年以降の目を見張るような経済発展にとっての基盤をなした」（ハーヴェイ、2013a：124-126）。

＜資本蓄積のための新たな分野＞

新自由主義化は、その発展を求めて富と所得を住民大衆から上層階級へ、あるいはより脆弱な地域からより豊かな地域へと再配分される。こうした動きは、前にも触れた「略奪による蓄積」を伴う。そして、ハーヴェイはその意味を、「資本主義の勃興期に見られたようなタイプの略奪的な蓄積実践に向けた転換が現在生じている」（ハーヴェイ、2013a：129）と表現する。その事例として次の事実が指摘されている。

「土地と労働力の商品化と私有化、農民を土地から強制的に排除すること（最近ではメキシコやインドで見られる）、さまざまな形態の所有権（共同所有、集団所有、国家所有）を排他的な私的所有権に転換すること、共有地（コモンズ）への権利を抑圧すること、生産と消費の非資本主義的な（土地の）形態を抑圧すること、資産（天然資源を含む）の領有、奴隷貿易と人身売買（これは今日でもとりわけ性産業において続いている）、高利貸し。そしてとくに破壊的だったのが、信用制度を利用して債務の罠に陥れ、他人の資産をむしり取ることであった（劇的な形として2006年以降にアメリカの住宅市場を席卷した、住宅ローンの抵当流れとそれによる住宅の喪失である）」（ハーヴェイ、2013a：129）。

さらに注目すべきは、資本蓄積のための新たな分野の開拓にも目を向けている。公益事業（水道、電気通信、交通運輸）、社会福祉給付、公共機関（大学、研究所、刑務所）、戦争や環境、年金基金、環境コモンズなど、これらの民営化／私有化は現在の市民が既に経験している（ハーヴェイ、2013a：129-131）。

＜政治の脱政治化・商品化＞

資本主義世界の大部分において、われわれは、政治が脱政治化され商品化される驚くべき時代に生きているとハーヴェイは言う。国家が金融投資家たちの緊急支援に足を踏み出した今日になってようやく、この国家と資本とが制度的にも人脈的にもかつてなく緊密に結びついていることが明らかになってきている。経済的支配階級は——その代理人として活動している政治的階級ではなくむしろ——自ら実際に支配しているように見える（ハーヴェイ、2012：272）。

擬制資本債務をパッケージ化し販売する新しい手法が開発され、年金基金のような諸機関に提供され、過剰資本の新しいはけ口を必死で見つけ出そうとしている。

裕福な個人や企業、あるいは国家に庇護された経営体（中国の場合）は、アフリカやラテンアメリカ全土で驚くほどの安値で膨大な土地を買いあさっている。多くの企業は、公的資金を

大量につぎ込まれながら、創造的破壊のこの絶好の瞬間をつかもうと虎視眈々としている（ハーヴェイ、2012：273-274）。

このようにハーヴェイは、新自由主義の露骨だが新たな企図と横暴さを強く批判する。同時に、彼は広範な領域における「精神的諸観念の変革」と新しい思考の重要性を指摘する。とりわけ、次のような知的領域や情報部門への革新の訴えが注目されている。

「われわれに必要なのは、世界を理解する新しい精神的観念である。・・・より広範に知の生産の上に影を落としている社会学的不安と知的不安の両者を踏まえてこのことを考える必要がある。新自由主義理論と結びついた精神的諸観念が深く定着していること、大学が新自由主義化し法人化していること、これらは現在の恐慌をつくり出す上でけっして小さくない役割を果たした。たとえば、金融システム、その金融部門、「国家 - 金融結合体」、私的所有権の権力、等々について何をなすべきかという問題は、伝統的思考の箱の外に出ないかぎり、しかるべき提起することができない。そうするためには、金融機関それ自身の内部だけでなく、大学、メディア、政府といったきわめて多様な場所で思考における革命が起こることが必要だろう。」（ハーヴェイ、2012：294-295）

ハーヴェイが重要性を強調する知的領域の革新や「精神的諸観念の変革」と新しい思考の創出に関連して、以下3人（フレデリック・ロルドンやウェディ・ブラウン、クリスチャン・ラヴァル）の著作とその主張を紹介し検討する。

（2）新自由主義社会における欲望と隷属

＜ロルドンのねらい＞

ここで取り上げるフレデリック・ロルドンの刺激的な著書『なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？：新自由主義社会における欲望と隷属』（原題は「資本主義、欲望、隷属——マルクスとスピノザ」）は、社会科学、とりわけマルクス主義を長らく呪縛してきた客観的構造重視の研究に新たな主観的構造を組み込もうとする分析である。その際、スピノザの「コナトゥス」概念が決定的な意味をなしている。

「社会科学は、長いあいだ、構造の実効性をより明確にするため、個人というものを超越し、忌避するという弁証法の罠に捕われ続けた。・・・構造に宿るエネルギー、いわば構造を[・]生[・]き[・]さ[・]せ[・]る、特異的[・]身[・]体[・]の[・]エ[・]ネ[・]ル[・]ギ[・]ーを見失わせることになった。この特異的[・]身[・]体[・]の[・]エ[・]ネ[・]ル[・]ギ[・]ーは、ある特殊な条件のもとでは、構造を変容させたり死滅させたりすることもある。この[・]エ[・]ネ[・]ル[・]ギ[・]ーは[・]コ[・]ナ[・]ト[・]ウ[・]ス[・]の[・]エ[・]ネ[・]ル[・]ギ[・]ーであり、構造を再活性化し、ときには構造を再起動させたりする欲望の潜在力の[・]エ[・]ネ[・]ル[・]ギ[・]ーである。」（ロルドン、2012：9、傍点筆者）。

そこで「コナトゥス」概念とは何か。ロルドンは次のように定義する。

「（それは）なんらかの対象を追求する欲望としての感情を呼び寄せる自動的かつ総体的な

力の跳躍であり、したがって、それはいつの時代にも可能ながざり無限の働きを行うもの
と考えることができる。」（ロルドン、2012：6）

こうした「コナトゥス」概念を前提に、ロルドンは現代資本主義を完成された「実質的包摂」
（マルクス）と把握し、それがどのように機能しているか、を根本から考察しようと試みて
いる。

「資本の蓄積の論理のために、人間の全生活を従属させること。こうした賃金労働者の精
神の完全な植民地化、労働者の感情や行動的潜在力のすべてを動員しようという企てであ
る。この生そのものの組み込みの全面化について思考するための概念的手段を、われわれ
は手にしなければならない。」（ロルドン、2012：11-12）

＜消費の発展と隷属＞

消費社会の発展は賃金労働者を消費者に変えてきた。社会生活のなかで市民の欲望を際限な
く拡大し商品による疎外という状況を生み出している。消費者の相貌が賃金労働者の相貌から
立ち上がってきたのは、フォーディズムの登場による。

「フォーディズムの時期が決定的な役割を果たした資本主義のこの上ない巧妙さは、商品の
拡張的提供と人々が要求を満たすための支払いの能力の提供によって、この欲望の動的再編を
引き起こした」ことである（ロルドン、2012：63）。

さらに、新自由主義資本主義は資本／労働関係の均衡を大きく変化させた。財やサービスの
市場の自由化にともない「構造変化によって資本と労働の力関係は一変」する。資本の前進の
行き着いた先は資本にはなんでも許されるという感情、かつては抑止されていたことがなんでも
できるという陶酔感をもたらすことになった（ロルドン、2012：76）。

ここには、諸個人が消費者へと一体化して賃金労働者としての立場を副次的なものとみなす
ように誘導するという、資本主義の規制秩序擁護の言説の巧妙さが見て取れよう。

「商品が賃金労働者の依存性をさらなる高みにまで引き上げる。しかしそこには、貨幣の獲得が
楽しくなるという感情もともなっていた。したがって、この商品と貨幣の前例のない規模
での展開は資本主義の大きな成功、に数えられるであろう。資本主義のコナトゥスの力は、
いわば資本主義が自ら存続し続けるための条件を自ら生み出すところに示されたのである。」
（ロルドン、2012：63）

多くの労働者は、自分が消費者として受け取る恩恵を賃金労働者としての隷属とのあいだに
関係があるとは考えていない。こうして、「商業的欲望のシステム（マーケティング、メディア、
広告、消費水準の伝播装置、等々）は資本主義の中心的諸関係への諸個人の隷属を強化」する
のである（ロルドン、2012：65）。

もちろん、賃金労働者は単にお金への欲望だけでなく、さまざまな要求と欲望をもっており、
個人的満足や賃金労働活動そのものに内属する充足感を求めている場合も珍しくはない。しか

し、「賃労働関係の新自由主義的形態の力は、まさしく欲望の対象を再内在化しようという企図に由来する」(ロルドン、2012: 104-105)。

＜「合意」と支配＞

国家は、人々を恐れによってではなく、人々が自分は導かれているのではなく、自分の意向と自分の自由決定にしたがって生きているのであるという感情を持つような仕方で導くことを追求しなければならない(ロルドン、2012: 153)。

このことは、「支配」概念一般についても言える。恐れよりも喜びによって支配すること、これこそがおそらく支配者が最も効果的に支配する方法であろう。しかしそのとき提供される喜びは厳密に限定されていなくてはならない。つまり提供される欲望の対象を厳密に選別しなくてはならない。したがって欲望をそそのものの配分を決定することは、支配の最も特徴的かつ一般的な作業なのである(ロルドン、2012: 176)。

「支配の要点は喜びの機会の配分に関係していると言えるだろう。つまり、賃金労働者の喜びのスペクトルを単なる金銭的な喜びを超えて広げるということである。たとえば企業内における地位の向上、認知、労働の社会的有用化などであるが、他方で、賃金労働者が熱望するあらゆる可能性をその職業生活の枠組みのなかに閉じ込め、それ以外のことについては話題から排除しなくてはならない。」

したがって、このような「調整された欲望」を生産し、支配される者の野心をその限界を超えたら希望はないと納得させる「支配的分配規制」という「絶えざる呪縛作業」が必要になる。言い換えれば、この作業は、支配される者に割り当てられる小さな喜びが十分なものであると見せかけるための満足感の想像世界と、彼らに大きな喜びをあきらめさせるための無力感の想像世界からなる、二重化された想像世界の生産によって成り立っている(ロルドン、2012: 177)。

＜感情の搾取と「自由裁量」＞

賃金労働者を機能させることが資本主義的な欲望＝快楽生産装置の任務にはかならない。そのためには、まずもって自動的機械としての賃金労働者という基本的位置づけに戻り、彼らが物理的に自ら機能するように仕向けることが肝要である。

「要するに、主人の欲望を自分自身の欲望と思わせること、これこそが賃金労働者を「機能させる、要諦である。捕獲のためにせせと働くことは自分自身の「自己実現、のために働くことであると信じ込ませることである。彼らの欲望は彼らがいる場所にあると信じさせること、そこでは幸運にも快適性と有益性がかさなり、主体の「自己実現、が主体の物質的再生産の必要性和重なりあっている、と信じ込ませることである。こうした想像力を利用した感情的誘導のすべての操作は感情の搾取である。そしてそれが功を奏したとき、組み込まれた者はもはや歩くのではなく、走り出すのである。」(ロルドン、2012: 193、

傍点筆者)

「自由裁量」は序列的隷属を憎む傾向性がある。そうであるがゆえに「企業組織は、主に賃金労働者の上層階層をターゲットとして、最も「自立的な、部下に対してこの序列的隷属性をできるかぎり軽微なものに見せかけたり、実際に軽微なものにしたりする。そのようにして彼らにこの隷属性を完全に忘れさせようと夢想するのである」(ロルドン、2012: 195)。

＜資本／労働の対立図式を超えて＞

現代の資本主義は、マルクスの時代の資本主義よりも非常に多様で差異に富んだ情動の風景を提示している。マルクス主義は、つねに「資本」と「労働」の直結関係の真正面にしようとしたために衰弱した(ロルドン、2012: 19)。

資本主義を乗り越えるための歴史的可能性はその原動力としての対立構造が、もはや「資本対労働」といった単純な図式ではありえないような歴史である。階級は確固として存在するが、この階級定義は、当初の単純な二極的図式とそれほど符合するものではない(ロルドン、2012: 231)。

かつてのこの階級の歴史的な原動力をなしていた同質性をもはやもっていない。したがって階級闘争の展望は消滅したわけではまったくない。それは中身と構造が変わったのである。それは「感情的な階級闘争になった」のである。いかなる先行的な共通感情がこの新しい感情的な階級闘争の中身と構造を生み出したかが問われなければならない。問題は対立的な階級としての資本ではなく、社会的関係としての資本、要するに社会生活の形態そのものとしての資本である(ロルドン、2012: 232)。

新自由主義は、一方で賃金労働者を喜ばせ満足させようとしながら、他方でかつて以上に虐待するという矛盾したやり方をしている。資本主義の歴史の原動力はひとえに賃金労働者にあると言ってすまずわけにはいかない。重要なのは賃金労働者の不満がある臨界点に達したとき、歴史は再び動き始める可能性がある(ロルドン、2012: 260)。

以上、ロルドンの「なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？」という問題意識を、すなわち個人の欲望の潜在力やその感情を資本主義の構造のなかで再発見する課題を同書にそって紹介した。

(3) 新自由主義への同意調達：新自由主義言説の浸透と成長

1) 民主主義崩壊の見えるダイナミズム

ウェディ・ブラウンの本書は、新自由主義が「民主主義の基本的要素を粛々と崩壊させていく」様相を「理論的」に考察している。この基本的要素には「語彙、正義の諸原理、政治文化、市民の習慣、支配の実践、そしてとりわけ民主主義的なイマジナリー」が含まれている。彼女は端的にその意図を次のように主張している。

「たんに市場と貨幣が民主主義を腐敗させ劣化させるということだけでなく、政治的諸制度とその帰結がますます金融資本と企業資本によって支配され、民主主義が金権支配、すなわち金持ちによる金持ちのための支配にとってかわられるということである。それどころか、新自由主義は今日、国政、職場、法制、教育、文化、そして日常の活動の膨大な範囲に偏在しており、民主主義の構成要素のあきらかに政治的な性質、意味、作用を、経済的なものに転換させる。自由民主主義的な制度、実践、習慣は、このように転換された後には、生き延びることはないかもしれない。ラディカルな民主主義への夢もまた、生き延びることはなさそうだ。」(ブラウン, 2017: 9、傍点筆者)

このように、ブラウンの主張は極めてラディカルである。同時に、本書はその目的からして「政治理論の書」である。すなわち、その目的は、「新自由主義が人と国家を新たに構成することによって、民主主義的諸原則を空洞化し、民主主義的制度を侵食し、ヨーロッパ近代の民主主義的イマジナリーを骨抜きにする、その概要と鍵となるメカニズムを説明すること」にある(ブラウン, 2017: 22-23)。

ブラウンの新自由主義理解は、本論の「はじめに」で触れたように「新自由主義を規範的理性の命令」と考えている。その命令が優勢になるとき、それは経済的価値、実践、方法に特有の定式を人間の生すべての次元に拡大する、「統治合理性」のかたちをとる。この理解は、ハーヴェイなどの政治経済史的な新自由主義研究とは対照的にミシェル・フーコーのアプローチと共鳴する⁵⁾。

＜非経済的領域と実践の「経済化」＞

この「統治合理性」は新自由主義による「生のすべての側面で徹底的で偏在的な経済化」(傍点、筆者)、すなわち非経済的領域や実践にふさわしい知識、形式、内容、行動をつくりなおすプロセスを含んでいる。しかし、新自由主義がすべてを市場化すると、必ず貨幣化をともなっていると主張することではない。ブラウンにとって重要なのは、「人類を市場の行為者であり、つねにどこでもホモ・エコノミックスでしかありえないものとして設定する」ことである(ブラウン, 2017: 26-27)。

それでは、現代の新自由主義的合理性による主体の「経済化」はどのような形で現れるのか。その特徴として、ブラウンは三点を指摘する。

第一に、古典的な経済的自由主義とは対照的に、わたしたちはあらゆる場所においてホモ・エコノミックスであり、ホモ・エコノミックスでしかありえない。これは、新自由主義が政治的および社会的思考に導入した画期的なことの一つであり、新自由主義のもっとも攪乱的要素の一つである⁶⁾。

第二に、新自由主義的ホモ・エコノミックスは、交換や利害の形態ではなく人的資源というかたちをとり、自身の競争地位を強化し、その価値を評価しようとする⁷⁾。

第三に、今日、人的資本とその活動領域はますます生産者や企業の資本だけでなく、金融資本や投資資本をその具体的なモデルとしつつある⁸⁾。

＜新自由主義の統治理性の浸透＞

新自由主義の統治理性の浸透について、ブラウンは面白い表現をしている。

「いかにして、新自由主義という独特のかたちの理性が、普通の制度の実践や日常生活の言説を飽和させる統治理性になったのだろうか」と問う。

「端的に言えば、暴力、独裁者の命令、あるいはあからさまな政綱ですらなく、^{コンセンサス}同意と^{バイ・イン}同意を利用する「ソフトパワー」をつうじて実行されるのである。新自由主義は洗練された常識として、それが着地し、定着し、支持を獲得した場所であればどこでも、制度や人間をつくりなおす現実原則として統治する。・・・新自由主義化は一般的には、ライオンよりもシロアリに似ている。その理性の様式は、毛細血管のようなやり方で、職場、学校、官公署、社会的かつ政治的な言説、そしてとりわけ主体の幹や枝のなかに入り込んでくる。」
(ブラウン, 2017: 32-33)

＜古典的経済自由主義と差異＞

新自由主義が古典的な経済自由主義と異なる一つの点は、あらゆる領域が市場となり、わたしたちはあらゆる場所で市場の行為者であるとみなされることである。もう一つの相違点は、新自由主義的合理性にあっては、市場の根本原理と基本財として、競争が交換にとってかわる点である (ブラウン, 2017: 32-33)。

新自由主義的ホモ・エコノミックスは、交換や利害の形態ではなく、人間を人的資源とみなすが、そのことは多くの波及効果をもっていると分析し、以下の重要な点を指摘する (ブラウン, 2017: 34-38)。

第一に、わたしたちは、「企業や国家にとって人的資源であるかぎり、企業や国家はそれ自体の競争地位に関心があるのであるから、わたしたちには安全や保護や生存ですら保障されていない」(ブラウン, 2017: 34-35)。

第二に、平等ではなく「不平等が、競争する資本の手段であり関係である。人的資本からなる民主主義は、平等な扱いや平等な保護ではなく、勝者と敗者の存在を特徴」とし、この観点からしても、社会契約は反転されている。

第三に、すべてが資本となると、労働はカテゴリーとして消滅し、その集合的な形態である階級もまた消滅して、疎外、搾取、労働者間の連帯を分析する基盤もなくなってしまう。同時に崩壊するのは、労働組合、消費者団体、資本どうしのカルテルを除くその他の経済的連帯の理論的根拠そのものである (ブラウン, 2017: 36)。

第四に、ホモ・エコノミックスしかなかったとき、そして政治的なものの領域そのものが経済用語で表されるようになったとき、公共物や公共善にかかわる^{シティズンシップ}市民性の基盤が消失し

てしまう。こうして、結局、「政治を殺すことなく公共生活を劇的に希薄化する」（ブラウン、2017：37）。

第五に、国家の正統性と任務が経済成長、グローバルな競争力、高い信用格付けの維持に結びつけられるようになるとき、自由民主主義的正義への関心は後退していく（ブラウン、2017：38）。

古典的経済自由主義と新自由主義との差異についての以上のブラウンの指摘は、結局、「新自由主義とは、それによって資本主義が最終的に人類を飲み込んでしまう合理性である」。この形態が普及することによって「自由民主主義の内容が空疎となり、民主主義それ自体の意味が変容させられるとき、民主主義への欲望は抑えつけられ、民主主義への夢は危機に瀕する」（ブラウン、2017：43）。

2) ホモ・ポリティックスとホモ・エコノミックス

ここでブラウンが議論する主題は、「ホモ・エコノミックスの新自由主義的反復によって、民主主義——民主主義のあらゆる変種——を実現させるような行為主体、言語、領域が消滅してしまう」との主張である。

この議論を始めるに当たり、ブラウンは再びフーコーの欠陥と限界、すなわちホモ・ポリティックスとホモ・エコノミックスの関連性を検討する。

フーコーは、この「ホモ・ポリティックスという生き物をけっして真剣にはとらえていなかったか、あるいはこの生き物は近代のごく初期に・・・舞台から蹴落された」とみなしていた。しかし、ホモ・ポリティックスは、「いかに生彩を欠いていようと、近代のほとんどの期間はホモ・エコノミックスと肩を並べて存在しており、両者の外形と内容はつねに部分的に変化しているが、その変化はお互いどうしの関係性によるものである」と、ブラウン示唆する。また、「ホモ・ポリティックスは新自由主義的理性の支配によるもっとも重大な犠牲者であり、その理由はとりわけ、ホモ・ポリティックスの民主主義的な形態が、新自由主義の理性が統治の合理性として具現化してきたときにそれに対抗する主要な武器となり、別の主張や別の存在の構想によってそれに反論するための資源となりうる」と論じる（ブラウン、2017：93-95）。この主張を補強するため、ブラウンはアリストテレスとスミスを参照する⁹⁾。

アダム・スミスのホモ・エコノミックスは剥き出しの利害関心の生き物からほど遠く、熟慮、個人の自立、抑制、主権のあらゆる基本的な要素を前提としている。「ホモ・エコノミックスはスミスにとって確かに利害関心に応じて作動するのだが、利害関心の形式は原始的でもなければ非歴史的でもない。利害関心は相互依存のなかで必要から生じており、言語と理性によって促進され、交換をつうじた相互利益の関係を生み出している」（ブラウン、2017：103）。

＜ホモ・エコノミックスがホモ・ポリティクスを克服する＞

ブラウンは「新自由主義によってホモ・エコノミックスがホモ・ポリティクスを克服してしまったことの隠された意味は何だろうか」と問うている。

ホモ・ポリティクスが現代の自由民主主義においてあきらかにやせ細っている一方で、市民主体が政治的存在から経済的存在へと転換し、国家が法的主権に基づくものから企業モデルとしたものへとつくりかえられたのは、ひとえに新自由主義的理性の支配によるものである。新自由主義が生のあるゆる領域を経済化に従わせるとき、その結果は、たんに国家と市民の機能を縮小するだけではないし、経済的に定義された自由の領域を、公共生活と公共財への公的投資を犠牲にして、拡大するだけでもない。むしろ、それは社会や政治の領域での自由の行使をラディカルに減少させるのである。

新自由主義革命は自由の名のもとに行われる——自由市場、自由な国、自由人——けれども、国家にとっても主体にとっても同じように、主権における自由の基礎を引きはがしてしまう。国家は市場に従属し、市場のために統治し、市場の移り変わりに応じて正当性を獲得したり失ったりする（ブラウン、2017：122）。

シティズンシップ
市民性の明瞭な政治的形態を失い、それとともに主権という衣を失ったとき、ホモ・ポリティクスは公共性への志向性と、いわば憲法によって奉られてきた価値への志向性を失っただけでなく、個人の主権を補強するカント的な自律性を維持することをやめたのである。ホモ・ポリティクスが姿を消して人的資源の形象がとってかわると、もはや各々の個人は、ミルの有名な言葉にあるように、「自分自身の幸福を自分自身の方法で追求する」といった権利をもたない（ブラウン、2017：123）。

ホモ・エコノミックスの覇権と政治的なものの新自由主義的「経済化」は、国家と市民の変容、アイデンティティの二つの重要な方向転換をもたらす。

一方で、主体の自分自身との関係、および自身の自由との関係を方向転換する。「自己は、権力と利害関心の生き物ではなく、投資されるべき資本、利用できる資金投入だけでなく特定の基準と規範にしたがって価値を高められるべき資本となる。

他方、国家と市民との関係を方向転換する。その結果、公共の価値、公共財、政治的生における人民主権といったものの劇的な縮小が生ずる。それは市場の評価基準にしたがうガバナンスの支配につながる。

こうして、古典的な自由主義の政治的基準（正義、市民の保護、多様な利害関心の均衡維持）は経済成長、競争地位、信用格付けへの関心にとってかわられるのである。人的資本として、主体は自己を管理し自己に責任をもっているが、全体にとってはなくてはすむ要素である可能性がある（ブラウン、2017：124-125）。

(4) 経済人間：富と権力への無限の渴望

本稿の「はじめに」で触れたラヴァルの著書についても若干述べておきたい。

ラヴァルのこの著書の目的は、「今や世界中の人間が、この＜経済人^{ホモ・エコノミクス}間＞に変身した成り行き」（ラヴァル、2015：2）を描くことにあった。資本主義における「人間としてのある特殊な歴史的形態」（ラヴァル、2015：2）、「きわめて特異なタイプの人間、たえずおのれの利益のために他人と争い、自分の役に立つときのみ他の人々と協力する気になるエゴイスト人間、そうした人間が生まれる経験」（ラヴァル、2015：1）を膨大な資料を通じて述べている。

現在のグローバリゼーションは、社会の規格化を強化し、人間のタイプの標準化を増大させている。ネオリベリズム（新自由主義）がここ数年で世界中に広がり、「人間関係のあり方を競争一辺倒にしたため、数世紀前から始まった人類学的大変動が一段と活発になり加速する事態」にわれわれは直面している。それゆえ、歴史的なとらえ方を試みるのがどうしても必要となり、ネオリベラル型人間は「経済人間の進化した一変種」であるとラヴァル言う。

このネオリベラル型人間の特徴は、「富と権力への渴望に限度」がなく、「ただあらゆる記録を塗り替え、成果を限りなく上乘せし、あらゆる欲望を満たそうとする」。こうした主体は、「いまや＜正しく理解された＞合理的な個人的利益に導かれるのではなく、世界の果てまで支配する金融資本主義と歩調を合わせて、際限のない欲望」に突き動かされている。「ネオリベラル型人間は、たえず自己増殖する資本と自分を同一視」（ラヴァル、2015：3）せざるをない、こう強調する。

このようにラヴァルは資本主義を「連帯、利他主義、友情、愛などを許さない人間概念を土台にしている」と考え、したがって「自然や瞑想や芸術が生まれる余地」はなく、「資本主義は自己発展のために、人間の悪い側面を利用した」（ラヴァル、2015：1）と資本主義の人間像を洞察している。

＜人類のための民主的未来に向け＞

われわれは、今日の新自由主義とネオコンの隆盛に歯止めの失った資本主義の拡張、伝統社会の破壊と社会的混乱、人間の内的無秩序状態、宗教的原理主義、専制的愛国主義などを目撃している。しかしながら、新自由主義の規範の論理が「私利と成金志向とは違う社会基盤を構築しようという願望」を生み出しているとラヴァルは述べる（ラヴァル、2015：4）。

そして、彼は今後の社会の進展に向けた「別の未来の展望」の可能性を次のように見ている。

「人類の大問題（貧困と格差、地球温暖化、金融投機と脱税、地域紛争、希少資源の枯渇、人口統計のアンバランス、国際テロリズムなど）を解決するには、国家利益や企業利益の論理を超えた国際協力を充実させるしかありません。・・・新しい時代とは、われわれがもう一度未来を自らの手に握ることのできる時代です。」（ラヴァル、2015：5）

「われわれの人類を守るために、人間社会における新しい連帯のあり方を考えつかなけれ

ばなりません。・・・愛と連帯の関係を育てること、それを目指す新しい近代の形を考えると、社会的・文化的の平等を真に実現すること、全員が共同して熟議し、決定しうのような、これまでよりもはるかに民主的な制度を作り上げることです。」

「明日の民主的人間の創造はユートピアではなく、ネオリベリズムに対抗する社会運動、生態学的異議申し立て、＜反グローバリズム＞の闘いと不可分の営みです。過去に入会権という慣習がありました。この慣習を21世紀の人類によみがえらせ、これをおのれの組織化原理に据えていくこと。こうした価値と規範の逆転を果たす知恵が試されています。」（ラヴァル、2015：6）

注

- 1) このことと関連して、国家性の変容と国家の「柔軟性」についてオングが語っている。中国の「開放」と市場的改革路線は、「主権のばら売りや脱国民国家化によって行われたのではなく、新しい例外空間や、国境を越える権力の創出によって行われた」のであり、「新しい資本主義的空間を作り出す柔軟性と創造性をもっていた」（オング、2013：159）ことになる。

結局、統治とは、「経済的發展、政治的安定、地域的組織化の条件を生み出すために必要とされる理論や技術や創意工夫をたえずグレードアップし続けることで、ものごとを問題化する活動のこと」である。そのためには、国家機構を超えたところに焦点をあてなければならない。中国本土における「市場改革」は、「経済的ネットワークを拡大し、政治的統合を生み出すための特別区を建設するために、主権の支配と例外化を抜け目なく自由に使うことを可能にしてきた」（オング、2013：179）のである。

- 2) 2017年報告書では、富める者と貧しい者の間の格差は、これまで考えられていたよりも大きく、世界で最も豊かな8人が世界の貧しい半分の36億人に匹敵する資産を所有していることが明らかになった。最新の2018年報告書では、世界で新たに生み出された富の82%を世界の最も豊かな1%が手にしたこと、一方で、世界の貧しい半分の37億人が手にした富の割合は1%未満であることを報告している。

- 3) 北朝鮮と韓国間の「非武装地帯」、キプロスを二分する「グリーンライン」、北アイルランドのベルファストや（ロンドン）デリーの地区を分離する「ピースライン」、西サハラを南北に縦断する砂の壁「ベルム」、インドとバングラディッシュの間の「囲い」、アメリカ-メキシコ国境の「フェンス」、モロッコにあるスペイン領の飛び地セウタとメリリャの「防護フェンス」、インドとパキスタンの間のカシミールにある「管理ライン」、そしてヨルダン川西岸地区のイスラエル人とパレスチナ人の「分離壁」などである（ノヴォスロフ／ネス2017：20）。

- 4) ①激化する不平等。

ロバート・ライシュ、ポール・クルーグマン、ジョセフ・スティグリッツなど経済学者。

アマルティア・セン、ジェームズ・ハーガソン、ブランコ・ミラノヴィッチなどによる開発政策批判。トマ・ピケティ。

②市場化に適さないとみなされた物や活動の、露骨ないし反倫理的な商業主義化。

デブラ・サッツの『それはなぜ売るべきでないのか』。

マイケル・サンデル『それをお金で買いますか』。

③企業と金融資本が国家とますます親密性を増していることや、政治的決断や経済政策における企業

の支配。

シェルドン・S. ウォリン『法人化した民主主義』、映画監督マイケル・ムーア、ポール・ピアソンとジェイコブ・ハッカー『勝者総取りの政治』。

④経済の混乱と不安定（ブラウン，2017：24-26）。

なお、以上の新自由主義への批判的文献と説明とについては、ブラウンの同書第1章の原注（24）から（27）を参照。

- 5) 新自由主義的合理性の規範と原理は、明確な経済政策を命じるのではなく、「国家、社会、経済、主体を構想し語る斬新な方法を提示し、これまでは経済の領域でも活動でもなかったようなものの、新たな「経済化」を開始する。新自由主義をこのように概念化することによって、フーコーの思考は、今日における新自由主義による脱民主化の影響を理論化するための、便利な出発点となる（ブラウン，2017：49）。

しかし、今日ではフーコーが予期しなかった新自由主義の特徴が多くある、このようにブラウンは述べ具体的に列挙している。この点は省略するが、「金融資本の勃興」や「ガバナンスの勃興」から「新自由主義の理性が安全保障と交差すること」などを挙げている（ブラウン，2017：73-76）。

こうして、ブラウンはフーコーの限界と批判を述べている。それは彼の新自由主義が「きわめて国家中心主義で、トランスナショナルないしグローバルな機関によって統治されておらず、国家、経済、市民社会の間の関係をナショナルな観点から解釈」されている点である（ブラウン，2017：76）。

ブラウンのフーコーに対する疑問と批判の基礎にあるのは、支配の形態としての資本主義を無視し、歴史的、社会的力としての資本そのものから目を反らしていたことであろう。フーコーの議論には「底辺からの社会的力はほとんどないし、共有された支配権力や共有された自由への闘争も存在しない。これらの欠如は、政治理論としてのフーコーの仕事の恒常的な限界」である。それゆえ、「フーコーの系譜学と統治理論、統治性、生政治には、主体は存在する——生産され、統治され、抵抗する主体である——しかし、市民は存在しないのである」。その結果として、フーコーは新自由主義的理性の説明を、「民主主義的な政治的生や市民性との交錯ないしそれにたいする影響の考察につなげない」。これがブラウンの批判である（ブラウン，2017：77-79）。

- 6) アダム・スミス、デヴィッド・リカード、ジェイムズ・ステュワードなどは政治的生を経済的生に還元しなかった（ブラウン，2017：29）。
- 7) ベンサム、マルクス、ボランニーなどが描いた主体とは異なる。
- 8) この論点は、「金融資本と金融化が経済行為にあらたなモデルをもたらしたということであり、そのモデルは投資銀行や企業のためだけに留保されているわけではない。・・・金融資本の時代に形成されたホモ・エコノミックスの行為と主体性は、アダム・スミスの取引、交易、交換とおおいに異なっている」（ブラウン，2017：30-31）。
- 9) アリストテレスはたんに人間の性質を政治的であると理論化しただけでなく、ホモ・エコノミックスの誕生を抑止しようと努力し、そのような生き物を「不自然」で「邪悪」だと指摘している。彼が「人間が原理的に政治的である・・・と定式化することは、その問題を扱うための基盤となる。人間が政治的なのは、言葉を使い、道徳的で、連帯する生き物であり、こうした能力を他者とともに自己統治するために利用するという理由からである」（ブラウン，2017：100-101）。

（松下 冽，立命館大学名誉教授）

Neoliberal Globalization and Democracy on the verge of a Crisis (1)

Neoliberal globalization drives social, economic, cultural, and ideological processes worldwide in the twenty-first century, which precedes the divide of each nation, community, region, and the pattern of thinking, including the constructions of walls, huge numbers of refugee and emigrations, and many conflict and terrorist activities.

This issue focuses not only on the global visualized problems noted above, but also the human invisible impulse caused by the neoliberal globalization.

Workers are delighted to cooperate with companies and democracy is hollowed out despite extensive resistance. Furthermore, fundamental human rights are violated as a consequence of the supreme control of market, competition, and reregulation by multinational companies.

Therefore, this paper considers these invisible questions from the perspective of the securing of mechanisms of agreement and rule by consent in a time of neoliberal globalization.

The next issue will analyze the phenomena related to transboundary violence in the Global South.

(MATSUSHITA, Kiyoshi, Professor Emeritus, Ritsumeikan University)